

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第48回

公社のさまざまな支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第48回目は、コンプライアンス(法令遵守)・CSR(企業の社会的責任)の観点から社会的価値の高い『ダスト濃度計』を製造し、大気汚染の軽減に向けて取り組んでいる株式会社田中電気研究所をご紹介します。同社には「ニューマーケット開拓支援事業」^(注1)などをご利用いただいております。

ふたたび『青い空』を!!

株式会社田中電気研究所

ゴジラとともに・・・

昭和29年11月3日、巨大怪獣「ゴジラ」の映画1作目公開と同じ日に、田中敏文社長は産声をあげた。祖父が創業した同社の代表取締役役に平成4年から就任。現在55歳の敏腕社長である。穏やかな語り口・誰に対しても分け隔てしない物腰の柔らかさは、社長の人柄を端的に現しており、一度会った人すべてがファンになるといっても過言ではないほどの魅力を備えている。そのあたりは多くのファンを持つ同級生ゴジラとの共通点かもしれない。

同社は電力量計の標準検定装置の開発から創業し、現在では大手電機メーカーの下請けとして放射線測定器の製造を主幹業務とする。その一方、社長が若いころから興味があった「環境ビジネス」への参入を決意。取引先顧客とのつながりでノウハウのあった『ダスト濃度計』の開発製造に乗り出し、ダストを排出する企業の社会的責任に訴えかけながら、大気汚染の改善に向けて日々奮闘している。

試練の連続

田中社長は昭和53年に大学を卒業後、大手電機メーカーに就職した。技術畑で6年間修行し、昭和59年、父が社長を勤める同社へ専務取締役として入社した。世はプラザ合意前年、その後の急激な円高により、もろに不景気の影響を受けた。

そのため、父である先代社長とリストラに着手せざるをえなくなり、入社当時42名いた従業員が、3年で25名にまで減った。何よりも人を大切にする企業を目指し、夢を持って仕事に打ち込み始めた矢先の出来事に、理想と現実の狭間で苦しみ続けた。しかし、神様はさらに新たな試

練を与える。

昭和61年、河川の氾濫により栃木県那須烏山市の自社工場が水浸しとなり、機械が水没。2,000万円以上の損害を受けた。さすがに挫けかけたが、元来のチャレンジャー精神のもと社員とともに奮起し、業務に邁進。危機



本社にて(小型ダスト濃度計とともに)

を乗り越えた。この時の経験で得た教訓が座右の銘「速やかなるを欲する無かれ」(焦るなどということ)となっている。

大気汚染との戦い

代表取締役社長に就任した翌年の平成5年から、本格的に『ダスト濃度計』の開発に着手。煙突からモンモンと噴き上がる煙との格闘が始まった。開発当初はバブル経済崩壊直後、所沢のダイオキシン報道がきっかけとなり、ばいじん(ダスト)が社会問題化していた。しかし、論点は直接人体に影響があるか否かに集中しており、現在ほど地球規模の環境問題が議論されていなかったといえる。

その後、経済のグローバル化が進み、環境問題の論点も、より地球規模へと急速に拡大していった。コンプライアンス・CSRが叫ばれる中、企業の倫理観が厳しく問われるようになり、大気中へのダスト放出を監視するダスト濃度計は大型の燃焼設備工場では必要不可欠なものとなっていった。

ところが、JIS^(注2)で規定されたダスト測定方法では連

続測定が出来ず、また、連続測定が出来るタイプのダスト濃度計は精度が悪かった。しかも、メンテナンスに手間がかかり過ぎる欠点を抱え、必ずしもユーザーが満足する効果をあげられていなかった。ダストを排出する企業は周辺住民や役所からの説明要求に対し、連続測定したデータがなければ説明責任を果たせない。そこで同社は「直接光散乱方式^(注3)」を採用し、簡単な設置による連続測定



ダスト濃度計

と今までにないメンテナンスフリーのダスト濃度計を実現した。また、検出感度が高いため、低濃度のダストも確実にキャッチ。正確な連続測定が同製品の強みとなっている。

ニューマーケット開拓支援事業との出会い

平成18年、工場が栃木県那須烏山市にあることから(財)栃木県産業振興センターの事業を利用、その縁で知り合ったNPO法人からの紹介で当社のニューマーケット開拓支援事業を知る。どのような支援をしてもらえるのか半信半疑であったが、審査ののち、ダスト濃度計は支援対象となった。

商社出身のビジネスナビゲータから売り込み先の紹介を受け、思いのほか実りのある商談が続いた。粘り強い交渉の末、大型の取引成立に結びついた案件も1つや2つにとどまらない。ビジネスナビゲータからは売り込み先の紹介のみならず、商談の進め方や製品へのアドバイス等中身の濃い支援を受けることができた。このようにして多くの大手商社との接点ができ、その後も関係は続いている。この点は、同社の誠実な対応や商道德を重んじる経営姿勢が奏功していることは言うまでもない。



台湾テクノマート会場で打ち合わせする田中社長(右)とビジネスナビゲータ(左)

また、当初から視野に入れていた海外展開にも積極的に取り組んでいる。ニューマーケット開拓支援事業の一環として台湾で開催される「台北国際発明展&テクノマート見本市」に参加、台湾市場への進出や現地代理店網の構築に活用した。

『青い空』の実現のために・・・

社長は学生時代、内向的な性格を打ち破ろうと大学を1年休学してアメリカへ渡った。夜行バスでロサンゼルス

からサンフランシスコへ向かっていると魅力的な一人のアメリカ人女性に乗っていた。「話しかけたい!」と何度も思いながらも明け方までそれができず、とうとうバスはサンフランシスコへ到着してしまった。その時の悔しさは今でも忘れられないという。

「出来ることは何でもやってみよう!」それが現在の会社経営のスタンスとなり、日本のみならず海外へも積極的に飛び出していくパワーの源となっている。

「環境保全に貢献する高付加価値企業」を合い言葉に、環境問題の中でも大気汚染対策に特化した専門店を目指す。大企業でも太刀打ちできない技術を身につけ、地道な経営姿勢で顧客の信頼を得る。この方針で今後も大気汚染と戦い続ける決意だ。

その決意に加え田中社長の大らかな性格に触れていると、大気汚染などとは無縁の透き通る『青い空』が東京のみならず世界中に広がることも、あながち遠い未来の絵空事ではないのかもしれないと思った。おそらくゴジラもそんな爽快な空のもと、思う存分暴れまわりたいと願っているに違いない。

最後に・・・アメリカでは奥手だった田中青年も、6歳年



下の可憐な奥様と4人の子宝に恵まれ、幸せな家庭人となられたことを付け加えておこう。

(事業戦略支援室 内田昇)

(注1)ニューマーケット開拓支援事業:自社製品・技術を60名のビジネスナビゲータが商社やメーカーへ紹介。販路開拓を支援する。

(注2)JIS:「日本工業規格」。ばい煙発生施設のダスト濃度測定はJISZ8808で規定されている。

(注3)直接光散乱方式:煙道または煙突に直接光を照射し、ダストによる散乱光を電気信号に変えて測定する方式。

企業名:株式会社田中電気研究所
 代表者:田中 敏文
 資本金:2,500万円 従業員数:33名
 本社所在地:東京都世田谷区経堂3-30-10
 TEL:03-3425-2381
 FAX:03-3425-2373
 URL:http://www.tanaka-e-lab.com/